

今夜の食事をお作りします

sample

sample

竹
内
良
雄
訳

夏の正午の太陽は、毒気をまき散らす満開の花のように、街行く人の元気を奪っていた。

空には雲ひとつ無いが、人々は日傘や日除けの帽子を雲に見たて、この灼熱に抗っている。しかしこの時の陽光はきつすぎて、あたかも旧時代の屋敷の門前の左右に置かれている石像の龍が、風雨を呼び込めないのと同様、日傘や日除けの帽子は役に立たない飾り物となっていることを知るよしもない。

陳青は新聞社の正門を出るとき、ぶるつと身震いをした。長い間クーラーのきいた部屋にいたため、突然襲いかかって来た熱気に押され、まるで暖かな居室から冷え切った戸外へ出たように、冷気と暖気の急激な入れ替わりのせいで、思わず身震いをしたのだ。

アイボリーホワイトの麻のワンピースに、ベージュのつばの広い帽子をあしらう。これが陳青の一番好きな盛夏の装いだ。

陳青はめつたに昼は家に戻らない。家が新聞社からわずか停留所三つ分しか離れていないのに、彼女はいつも食堂で無料の昼食を受け取り、隅に持つて行って適当に食べ、そのあとオフィスに戻り、机に伏してうたた寝するのが習いだった。

『寒市早報』^{ハンシーザオバオ}は寒市メディアグループ傘下の新聞で、この二百万の人口を擁する都市で、三十数万部の発行部数を保ち、業界の人から羨ましがられている。この新聞社の社員は、年末ボーナスが大体給与と同水準を保つたため、メディアグループが管轄する九紙の中で、『寒市早報』記者のいでたちが一番偉そうだった。男性記者はカジジュアルブランドの服装、女性記者の持つているバッグ

類も安物ではなかった。同じように彼らの足音も他の人とは違っていた。男性記者はリズムカルで力強く、女性記者はハイヒールをカツカツと響かせ、その分厚い自信、旺盛な精神状態、心中に漂う驕りをはつきり示していた。

陳青は『寒市早報』の学芸部で仕事をしている。もし売れている新聞を人間の臓器に喩えるなら、報道部がその人間の心臓、経済部が肝臓、娯楽スポーツ部が肺臓、現地取材編集部が腎臓だ。では、学芸部はどうか？ それはせいぜい胆嚢か脾臓に過ぎない。重要といえば確かに重要で、人体の雑多な成分を濾過し、調和し、血液の循環と再生を促進する。だが重要でないといえれば重要でなく、胆嚢や脾臓を切除しても、人間はこれまで通り生活できる。しかし万が一人間の心臓を取ってしまったら、魂もそれと一緒に無くなってしまうのだ。

陳青は気分が良かった。間もなくお昼というころ、彼女は呼ばれて総編集長室へ行った。総編集長は彼女に告げた。「さつき編集委員会が終ったんだが、この新聞業界のますます激烈なる競争の時代に、発行部数の維持と更なる上昇を目指すには、市場の需要に素早く応じなければならず、新聞もたゆまぬ改革を實行しなければならぬ、というのが委員連中の意向だ」総編集長はこの話を終えると、学芸部の重要性を強調し始め、文化は永遠にその民族の最も上質な精神の糧だ、といった。陳青は総編集長の意図をすでに八、九割理解した。またも学芸部が殺戮に遭遇するはめになった。果たして、総編集長は、少し芝居がかった溜息をついて話題を変え、陳青が主編の「菜瓜飯」欄の運命が、死んだ魚のように水面に浮かび上がった。

編集委員会は、「菜瓜飯」文学欄を現在の週一回から二週一回に変えることを全会一致で決めたという。しかし二年前にも、週二回だったのを週一回に圧縮されているのだ。「菜瓜飯」は、未婚の内に孕んだ胎児のように、一度、二度と削り取られた。

総編集長は陳青にいった。「今回の紙面の調整でも、学芸部の基本給はこれまで通り支給する。ただボーナスはやはり影響を受けるだろう。しかし前回減額したほどには大きくないはずだ。もし『菜瓜飯』欄に替わる『再婚堂』が、新聞の売り上げを押し上げるようなら、学芸部のボーナスもそれ相応に上向くはずだ」

紙面の割譲は土地の割譲と同じで、通常とても心が痛む事だ。しかし陳青にはどうでもよかった。学芸部は『寒市早報』の中で一番清浄な一隅だというのが、仕事の環境としては、言いようのないゴタゴタを彼女は感じていた。それ故、総編集長がこの話を終えても、彼女は平静な気持ちで答えた。「それはいいことですわ。最近離婚率が上昇し、再婚者がますます増えています、『再婚堂』は当然『菜瓜飯』より人の目を引きつけるはずですよ」「わしは君が大局を捉えられる人だっことは知ってたよ！ 文学欄は二週に一回となるから、三人は必要ないだろう。我々は姚華ヤオホウに『再婚堂』欄へ移ってもらって、そちらの戦力を増強し、君と老于ラオユは一緒に『菜瓜飯』を支えていつてほしいと思ってる。人手は十分だと思いが、どうかかな？」ふだん総編集長の話には適切さが欠けているが、陳青は彼のこの「支える」という単語はびつたりだと思った。確かに、彼女と老于は荒れた菜園を守り続ける老いた農民で、賑やかな世の中を前に、時代遅れの瓜や野菜を植えているのだ。

学芸部の運命は目まぐるしく変わり、すでに陳青は、半分引退のような状態になってしまったが、まさにこれは彼女が夢にまで望んだ状態だった。総編集長室を出ると、彼女は食堂へは向かわずオフィスに戻り、パソコンを閉じ、日除け帽子とハンドバッグを持って、帰宅するために階段を下りた。彼女は頭を上げ、胸を張り、歩みに今日ほど活力が満ちたことはなかった。吹き付けてきた熱波に身震いして、体がちよつとよるめかなかつたら、彼女の足どりは最後まで軽やかなままであった。

陳青はしばらく行くと、宏達街ホンダーの歩道橋を渡って、近道をして家へ向かった。その道は紅藍巷ホンランシェンという狭い小さな通りだ。彼女の家族の名がみな色と関係があるせいからか、彼女はとても紅藍巷が好きだ。長さ六百メートルそこそこ、幅五メートル足らずの紅藍巷の両側は、東と西で天と地の差があった。

紅藍巷の東側は高層ビルが建ち並び、西側の方は低くひしやげた再開発を待つ家々だ。造りに工夫を凝らしたショップは東側で、たとえばホテル、ヘアサロン、クリーニング店、小型スーパーなどがある。一方西側を塞いでいるのは雑貨店、自転車修理店、葬儀屋、靴修理店と廃品回収スタンドだった。

紅藍巷両側に行く人の服装も異なっていた。東側に行く人は鮮やかでぱりつとした服装だが、西側に行く人は地味でくたびれている。路地の地面ですら東西分かれ、その違いがハッキリしていた。東側は綺麗に整えられているが、西側は汚れて凸凹でこぼこし、あたりに痰唾の痕、紙くず、腐った果

物や野菜屑がころがっていた。

太陽は勢いよく燃える大きな火の玉のように、眼下の建物や街路を薪のように焚き上げて、自分の腹を満たそうと企んでいる。陳青はローヒールのサンダルを履いていたが、靴底が焼けるような気がした。

紅藍巷の通行人はほとんどいないし、車両も少ない。真昼に出かけたがる人などいない。たまたま人影があつても、ちらつくのは西側だ。どうやら貧乏な人は寒さと酷暑に耐える能力も強そうだ。靴修理店と自転車修理店は、あいかわらず物静かに商売を営んでいる。

陳青が歩いて行くと、ふいに犬の鳴き声が聞こえた。頭を上げて見渡すと、前方の路上に一台のロボの引くりヤカーが止まっており、体の小さなロボが彼女の方を向いて、激しい陽光の下でぼつんと立っていた。犬の鳴き声はロボの引くりヤカーが止まっているあたりの窓から聞こえてきた。

濃灰色と薄茶色の毛が入り交じったロボは、見たところ三、四歳といったところだ。耳を垂らし、首を曲げ、なにか考えているかのように、じつと陽光の中で立っていた。

車には数個の段ボール箱が積まれ、青いシャツを着た顔の黒い男が顔中汗だらけにして、集合住宅から出て来て、段ボール箱を肩にかつき運んでいる。段ボール箱の包装のマークに「磁製タイル」という字が読み取れた。彼が疲れた表情をしているのも無理はない。

ロボの主人が出てきて荷物を運んでいるとき、犬は吠えるのをやめる。しかし彼がいなくなると、すぐにワンワンとまた吠えだす。どうやら犬はこのロボに吠えているようだ。

陳青はリヤカーに近づいた。犬は彼女がロボの主人でないと分かっているようだ。なぜなら陳青が立ち止まっても、犬は吠え続けていたからだ。陳青が鳴き声のする方を見ると、見えたのは絹のような光沢をした大型のシャーペイで、主人に抱かれ、二階のサンルームから身を乗り出すようにして吠えていた。犬は黒色、抱いている女主人の方は白の pajama を着ていた。犬は吠え続け、太った女主人の白くむくんだ顔には満ち足りた笑みが浮かんでいる。サンルームの閉ざされた窓と壁の外のエアコン室外機のファンの唸りから、犬と主人が十分な冷気を楽しんでいるのが見て取れた。

ロボの主人がまた段ボール箱を担ぎに出て来ると、声がしばらくやんだ。しかし青のシャツが建物の中に消えると、またシャーペイの鋭い鳴き声がサンルームの窓の隙間を通して伝わって来る。陳青は再び犬を抱く女の顔に浮かぶ笑みを見た。

ロボは頭を傾げ、静かにそこに立ち、激しい陽光に晒され、炙られている。犬の敵意に、ロボは少しも動じない。ロボの物静かな、堪え忍ぶ表情に陳青は深く感動し、思わず帽子を脱いで、ロボの頭にかぶせた。彼女の行為がシャーペイを怒らせ、吠え声が増すますますひどくなった。陳青は帽子をかぶったロボの様子を見ようともせず、先に進み、急いで紅藍巷を通り抜け、人声で沸き返る中チュンチン正街リンシイホウエンに出て、臨水花園のマンションに帰ってきた。玄関ドアを入ると、とたんに涙がポタポタ落ちてきた。

哀しい気持ちを抱いたまま、陳青は寝室のエアコンをつけ、カーテンを引き、ブラインドを閉じ、太陽の光を室外に締め出した。シャワーを浴びてネグリジェに着替えようとしたとき、ふと

彼女は、あの白地に紫の花のコットンコットンのネグリジェを思い出した。夫が前妻のために買ったネグリジェだ。夫の馬毎文マメイウェンが言うには、彼がロシアからこのプレゼントを持って帰ったとき、彼を待っていたのは妻の冷たくなった死体だったそう。馬毎文は陳青と結婚するにあたって、前妻の持ち物をすべて処分したが、唯一このネグリジェだけは残した。馬毎文が陳青にこれを贈ったとき、前妻はこれに袖を通していないし、持ち主がいらないから、といった。しかし陳青はこれまでそれを着る勇気がなかった。彼女がクローゼットから服を取り出す際、何気なくそれに触れたときなど、幽霊にでも出会った気がして、胸がざわついた。

陳青はいまこのネグリジェを着てみたいと強く思った。それに凝結している冷たい雪片で、彼女が紅藍巷で浴びた濃厚な暑気を駆除できるかのように。

彼女はクローゼットを開け、ネグリジェを取り出した。埃がついているわけではなかったが、彼女はやはり力一杯幾度か振るって頭からかぶった。このネグリジェはバストのところが少しきつい以外、ウエストは陳青の体にピッタリだ。着た瞬間、まるで他人の物を盗んだときのような動悸を彼女は少し感じた。洗面所の姿見の前に行き、自分を見た。柔らかな光線の下、この白地に紫の花のネグリジェは、月夜に波を浮かべる川のように、とても静寂に映った。

ネグリジェはV字型の襟ぐりに、肩の部分は手のひらほどの幅で、襟ぐりと袖ぐりには白の縁取りが施されて、素朴だがロマンチックに見える。ネグリジェの形から判断すると、前妻はモデルのようなメリハリのあるスタイルで、胸は陳青ほどむっちりしていず、脚はすらりと長かったのだろ

う。なぜなら陳青がそれを着ると、裾が少し床に触れ、ちよつと長すぎるからだ。バスの圧迫感と床を引きずらんばかりの裾は、一篇の文章で二か所書き損なつたようなもので、彼女はいささか弱気になつた。

前妻は水泳のコーチだつた。だからスタイルがいいのは当然だ。こう考えると、まるで文章を直す妙案を探し出したように、ずいぶんと心が軽くなつた。彼女は冷蔵庫のヨーグルトを食べてから、気持ちのよい昼寝をするつもりだつた。

ちよつどのとき、玄関ホールに音がして、馬毎文が戻つて来た。

馬毎文は中肉中背で、顔はほつそりしている。目は小さいが、眉毛は非常に濃い。陳青は夫が屋に戻つて来るとは考えもしなかつたし、馬毎文も妻が家にいるとは思わなかつた。二人の視線が出あうと、意外なことに、なんとなくさこちなさと恥ずかしさを感じた。互いに黙つたまま二、三分見つめ合つたあと、馬毎文の顔にふいに赤みが増した。陳青は知つていた。これは夫が快楽を求める信号だ。果たして、彼はクローゼットから青のパジャマを取り出すと、洗面所に入つて行つた。馬毎文は完全主義者で、ここ数年、妻の前でパジャマの着替えをしなくなつたのは、おそらく腰回りについた贅肉と張りの無くなつた胸を隠したためである。すぐに、浴室からザーという水の音が聞こえてきた。馬毎文がシャワーを使い始めた。

陳青はセックスをする気持ちはまるでなかつた。彼女の目には、昼の焼け付くような日光の下のロバがずつとフラッシュバックしていた。自分がベッドに横たわるべきかどうか分からず躊躇して

いると、水の流れる音が止んだ。馬每文はきつと我慢ができないくらい急いでいる。簡単にシャワーを浴びるとすぐに出てきた。彼は陳青を見ると立ったまま、彼女を抱きしめ、激しくキスをしたが、こんなに衝動的なのは久しぶりだった。馬每文は陳青を抱いたままベッドに行き、ベッドのサイドテーブルの引き出しから慣れた手つきでコンドームを取り出し、いつものように歯で袋の口を引き裂いた。彼の情熱が沸き立ったとき、陳青が突然冷たく言い放った。「私、やりたくないわ」彼女は「やりたくない」という言葉を使ったが、今までこんなはしたない言葉を使ったことはなく、馬每文は呆氣にとられた。陳青は言葉を継いだ。「私とやっているとき、前の奥さんの名前を呼ぶんじゃないか心配だわ」

馬每文はとたんに白けてしまい、陳青の体の上で力が抜けた。だが自尊心と怒りがすぐさま彼の気概を取り戻させた。彼は陳青の体から飛び降りると、ベッドの横に立ち、使い道のなくなつたコンドームを引き裂くと、陳青の顔に放り投げた。

陳青は人形のように横たわっていたが、ねばねばした薄汚いゴムの碎片が唾棄された痰のように一つずつ口、脛、鼻梁の上に落ちた。馬每文が背を向けて出て行くとしたとき、彼女はぱつとカモシカのように床に飛び降り、顔の上のゴムの碎片を振り落とした。彼女は微笑みながら、両手をネグリジェのV字の襟ぐりに伸ばすと、左右に広げて力一杯引き裂いた。綺麗なネグリジェは瞬間に形が変わり、長い裂け目が首から腰まで走った。

その裂け目は地平線のように、天と地を分けた。この昼から、二人の家庭内別居が始まった。

陳青の実家は、寒市郊外の曼蘇里マンズリーにあつた。

字面だけ見たら、きつと「曼蘇里」を金持ちたちの、ロマンチックな場所と思うに違いない。だが実際は違う。曼蘇里は貧乏な地域で、ここに集まつて来る多くは野菜農家や労働者や小商いをする連中だ。

臨水花園のマンションからバスで曼蘇里に行くには三度乗り換えねばならない。これまで陳青が里帰りのときは、いつも馬毎文が車で送つてくれた。彼らが実家に顔を出すときはいつも鶏や鴨や魚、点心や果物などの食べ物を持つて行つた。彼らが行くと、隣人が陳青の実家からかいて来るので、陳青は彼らにも少し分けた。鶏のもも肉をかじつたり、大口を開けて点心を食べているとき、彼らは馬毎文に陳青のことを語つた。彼女が小さいときに王三婆ワンサンさんの手伝いをしてオマルをひっくり返したとか、十三歳のときにはミシンを踏んで家の人に服を作つたとか、ある年畑に捨てられていた大豆を拾い、正月にこの豆で豆腐をたくさん作つたとかいう話だ。おそらくよその家の物を食べるという負い目があるからだろう。結局はご機嫌取りの話だ。話のいくつかは、馬毎文がもう何度も聞かされた話だが、彼はやはり聞きたい素振りをしなければならなかつた。

曼蘇里の家屋には二種類ある。ひとつは、二階建てのレンガ造りの建物で、ワンフロアーが四戸、暖房や水道が備わっている。ビルと平屋の中間に位置することから、これらの人はそれを「土楼トウ」と呼んだ。土楼の歴史はそれほど長くなく、十数年ほどで、そこに住んでいるのはほんの少し

豊かな連中だ。もうひとつは、粗末な土壁の平屋。かなり古いので、がたがたになり、斜めに傾いている。土楼に住んでいる人は、みなここから引つ越してきた。陳青の四兄妹も、みな土壁の家で生まれている。この家の天井は古新聞と柘目模様紙を張ったもので、冬の夜に寝静まると、ネズミがよく上をツルツルと足を滑らせているし、夏に雨漏りがすると、雨水が溜まって紙が膨張し、あちこち丸く泡のように膨らんで、まるで紙の天井に涙を溜めた目が生じたようになる。

陳青の父は陳大柱チエンダーチユといい、すでに六十六歳になっていた。彼はもともと宏偉ホンウエイ匠延工場の旋盤工だった。その後、工場が閉鎖したので、五十三の時に曼蘇里のコミュニティーサービステーションに入り、パイプの詰まりを直す配管工となって、人から「陳師傳チエンシイフイ」と呼ばれていた。陳青の母は夫より六歳若く、皆は彼女のことを「陳師母チエンシイム」と呼んだ。彼女は六十の坂を越えたばかりだが、七十をとうに超えたように見えた。髪の毛は真っ白、歯の大半は抜け落ち、下まぶたは垂れ下がりが鳥が巢を作れそうなほどで、カサカサの顔は皺だらけだった。彼女は若かりし頃、宏偉匠延工場では有名な美人だったが、のちに事故で片腕——それは高速で回転するギアの中に食い込まれていった——を失った。人はひとつたび障害を負うと、美という資本も共に流失するものらしい、彼女は背の低い醜男の陳大柱に嫁いだ。陳大柱は気が短く、酒好きで、飲んだあと、しばしば妻に暴力を振るった。陳青の母はまるで夫の奴隷のように、一日中従順に首を垂れていた。

陳師母の体で一か所だけ、高々と拳がり、よく動いたところがある。それは彼女の残った方の手だ。彼女は慣れた手つきで洗濯をし、野菜を切り、部屋や中庭を掃除した。両手でするべきこと

を、片手で引き受けたので、それがどんなに大変なことかは想像に難くない。しかしこの大変さが逆に、この手を普通の手よりもずっと生き生きと見せた。彼女は普段言葉が少ないかわりに、手はいつも軽やかに動き回る。まるで長い舌のように、彼女の心の中の言葉を途切れることなく取り出したのだ。

陳青はローストチキン一羽と、点心を二箱持ち、まず乗ったのは臨水花園からチチヤン齊正街行きの六番のバスで、この路線は市の中心の幹線道路を走る。車輛は二階建てのデラックスバスで、空調があり、自動改札だ。大型バスの明るいガラス窓を通して見える建築物は立派で、行き交う人の装いも凝っている。もしこのようなバスが素晴らしい馬だとしたら、緑の木と花壇に取り囲まれ、広く整った道路は、そのために設けられた素晴らしい鞍だ。しかし齊正街で降りて、三八番の路線延長バスに乗り換え、児童病院方面に向かったときは、車輛は普通のバスに変わった。浅緑色の旧式の扇風機が数台、天井からぶら下がっているが、二台はすでに壊れ、微動だにしない。動いているのでも、喘息病みたいに、音は大きい力が無い。土曜日のせいか、人出が多く、車内は汗の臭いがきつい。陳青は手にぶら下げた美味しい食べ物に臭いが染みて、味が変わってしまうかもしれないと心配した。児童病院で下車したときには、頭がくらくらしてポーツとなってしまうた。二十分ほど待つてから、ようやく郊外のボイラー器具工場行きの一―二番に乗った。このバスはフロントがへこんでいて、どうやら最近事故を起こしたようだ。車のボディの白色塗料はほとんどが禿げ落ち、ボロを着た人のように、とても粗末に見える。乗客はあまり多くなく、陳青は乗るとすぐに

空いた席を見つめられた。運転手は運転しながら、うつとうしい茶髪をした車掌といちゃつき、くすんだ色の服を着た乗客がそれにつれてときどき笑い声をたてている。汚れたガラス窓の外は埃が舞い上がり、高い建物が少なくなり、花壇も見られなくなった。道ばたの樹木もまばらになり、東側に一本、西側に一本という具合になってきた。陳青は、馬毎文が今どこにいるのか分からないことを思い、内心いような戸惑いを覚えた。結婚して六年、馬毎文が初めていなくなったのだ。ベッドを別にしてしている男が週末に家族に一言もなく出て行くからには、どんな事情が起きたのか彼女は心中よくわかっていた。彼女がぼんやりしていたちようどそのとき、「ガタン」という音がして、バスがふいに止まり、終点についていた。ガヤガヤとして混雑しているボイラー器具工場の停留所では、小型マイクロバスの呼び込みの音が充満していた。これらの車はすべて曼蘇里行きだ。「曼―蘇―里―曼―蘇―里―」まるで曼蘇里が焼きたての焼餅シヤオピンのように、熱いうちに売ってしまわないと、とでもいうように声高に叫んでいる。

曼蘇里のたいていの人は陳青を知っていた。灰色の格子縞のだぶだぶの短パンと白の綿シャツを着た車の主が陳青に向かって叫んだ。「これは陳記者様じゃないか？ 今日はおひとりでご帰還かい？ お宅の馬社長の車は？」彼は大声でこういうと、陳青を気遣いもせず、視線を彼女に向けた。

陳青はこの男を知っていた。彼は曼蘇里で有名な飲んだくれで、名字は蔣ジヤンという。毎日かならず白酒バチエウを八両四百（CCC）飲むので、人から「蔣八両」と呼ばれているそうだ。酒を飲んでよく妻に手を上げ、妻はこの暴力に耐えられず、離婚し、五歳の息子を連れて出て行ってしまった。誰もかま

う者がいなくなった蔣八両は、浴びるように飲むようになった。アルコールに長年浸かった結果だろう、顔は赤紫になり、たとえ酒を飲んでいなくとも、飲んでるように見えた。そのうえよく車を飛ばしたが、乗客はだからといって嫌がる風もなく、かえってガタガタの埃まみれで、廃車扱いとなった車を改装したこのマイクロバスに乗るのが好きだった。というのも性能のいい車ではよく故障が起きたが、蔣八両が運転する車は落ち着いた恒星のように自分の軌道に沿って走り、これまでに一度も外れることがなかったからだ。

陳青はやむなく蔣八両の車に乗った。彼女が席に座るや、蔣八両は運転席に飛び乗って、ドアをガラガラと音をたてながら引つ張り、いった。「陳記者様のご帰還だ。さあお客を待たずに出発だ！」まだいくつも席が空いていたが、かれはアクセルを踏み、飛ぶようにボイラー器具工場の停留所を離れ、曼蘇里に向けて出発した。

窓の外の風景はますます目まぐるしく変化した。都市と農村の境目には、いくつか大きな工場、たとえば発電所、ビール工場、セメント工場などがあつた。工場地区では大きな煙突が年がら年中真黒な煙と粉塵を排出し、付近の住民の多くが不平不満を抱いていた。新聞社が開設している市民とのホットラインは常々この一帯の住民からの苦情を受けていたが、記者たちはせいぜい上に状況を報告することしかできなかった。また環境保全局と議会の監査局の人間が調査に訪れたが、彼が残したものといえば足跡ぐらいで、相変わらずこの一帯は埃まみれだった。

これらの工場を過ぎると、曼蘇里の人が耕す大きな農地になる。凸凹の道には農業用三輪車やバ

イクが多くなり、埃はますます勢力をふるった。泥道で行き交う車輛が巻き上げるのは人の息を詰まらせる濛々とした埃だ。それは憚ることなく車窓の中に侵入し、なん本もの汚れた手のように、人の淡い色調の服に汚れをなすりつけていった。

これまで同様、陳青が曼蘇里に入るや、まず最初に会いに行くのは兄の陳墨だ。こんな暑い日も、陳墨は変わることなく緑色の制服を着て、曼蘇里のいくつもの郵便ポストのあいだを行ったり来たりしていた。まるであの緑色のポストに彼の生命のすべてが詰め込まれているとでもいうように。

陳青は車を降りると、陳墨に声をかけた。「兄さん」

陳墨が振り向いて見ると陳青なので、口をほころばせて、屈託なく叫んだ。「青」

陳家の四兄弟の名前は、すべて色に関係がある。長男が生まれたのは雪の真夜中で、空には厚く重い墨のような黒雲が凝集していた。そこで陳大柱はこの子に墨という名をつけた。陳青も真夜中に生まれたが、満月の照り映える秋の日で、夜空が青黒く、そこで「青」という一字を取ってつけられた。陳青の下は妹で、彼女は砂塵の舞う日に生まれ、天は黄土色だった。そこでこの子を「陳黄」と名付けた。彼女は陳青より三つ下で、とうに三十を越していた。まだ結婚していないが、つき合ったと思うとすぐダメになる。彼女自身はその男運の悪さをその「黄（黄という字にはダメに）」という字のせいにしていた。陳家の末っ子は、美男子で、生まれたのは夏の日の空が白むころなので「陳白」といった。陳白は現在寒市の理工大学化学学部の博士課程で学んでいる。